2022・1号

直江の津

◉上越なおえつ信金倶楽部◉

49号

2022・1-2022・6

◉特集1◉

2021 夏から秋へ なおえつうみまちアート

◉特集2◉

高田・直江津合併 上越市発足50年

100年前に「上越発展策」を提言した人たちⅡ

巻頭エッセイ◉わたしの直江津

直江津の歴史に触れて

小林優樹

頸城の空間を駆ける 国府―春日山―府中―直江津へ

府中の宴 "瓦灯"を素材として

歴史は「今日」への手紙

さまざまな歴史の声に耳を傾ける

直江津の歴史に触れて

小林優樹

私は長野県上田市の生まれで、縁あって六年ほど前に上越市へやってきましたが、直江津とのかかわりは実は子どもの頃からあり、夏になると家族で海水浴や水族博物館へ訪れ、夏の直江津を満喫していました。そのため、私の中で直江津は、「海のあるまち」という認識でした。

ご存じのとおり、長野県は〝海無し県〟なので、長野県民は海に対して、強い憧れがあります。私も子供の頃から、海が見える度に感激していたものですが、上越市に暮らし始めた今でも、直江津の海を見るとテンションがあがります。この感覚はどうにもこちらの友人には理解してもらえず、少しの寂しさと勿体なさを感じています。

季節に応じていろいろな表情を見せてくれる直江津の海ですが、ある時、よく晴れた日に海へ目を向けると、波も穏やかで美しい緑色の海面が見えたので「きれいなエメラルドグリーンですね」と形容した際には、「そう感じるのは小林さんだけだよ」と苦笑されたりもしました。

私にとっては、海があるだけで充分魅力的な「海のあるまち」直江津ですが、仕事をとおして、直江津の歴史に触れてから、奥深い直江津の更なる魅力を知ることになります。

上越市教育委員会の文化行政課に異動してきた折、日本遺産北前船の業務を担当することになりました。日本遺産とは地域の歴史的魅力や特色を語るストーリーを文化庁が認定するもので、上越市は平成三〇年に日本遺産「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間　北前船寄港地・船主集落」に認定されています。また、北前船とは諸説ありますが、日本遺産では江戸時代中期から明治三〇年後頃まで日本海側を西回り航路で航行し、商売をしながら各地の港に立ち寄った商船群を指します。直江津はその北前船の寄港地の一つでした。

そもそも直江津は中世以前から水陸交通の要衝であり、室町時代に成立した海上法規「廻船式目」では、当時の重要な一〇の港である「三津七湊」の一つに数えられ、また、上杉謙信公の時代には、当時の有力な財源であった、青苧の積出港として手厚く保護され、北前船就航以前から港町として大いに栄えていました。

慶長一九年、徳川家康は大阪の陣前夜を控え、高田城築城を命じ、福島城が廃されると直江津は今町と港だけが残され、まちの規模は縮小してしまいましたが、直江津の港は高田藩の外港として、北前船をはじめ多くの船が立ち寄り、当時越後国で一番人口の多かった城下町高田への消費物資の供給や頸城郡の村々、東北や信濃の町や村への塩や砂糖・茶・塩魚・鉄・藍玉・瀬戸物などの供給、高田平野やその周辺の山間地、東北や信濃の産物の移出といった重要な役割を担うことで、再び港町として発展していきます。城下町、つまり政治、経済の中心が移動することで、消滅してしまうはずだった直江津の町は、港のおかげで消滅の危機を免れます。

明治三〇年頃になると北前船は次第に姿を消し、各地の寄港地は衰退していきますが、直江津は明治二六年に信越本線が直江津から高崎まで全通すると、物流の拠点、交通の要衝としての本領を発揮し、ますます栄えていきます。

このように、直江津には大変興味深い歴史があることを知り、直江津に対する認識がさらに深まりました。

残念ながら現在の直江津には、北前船に関するものがあまり残っていません。これは火事がとても多かったということもありますし、直江津は時代にあわせ、発展してきたまちだからかと思います。しかし、注意深く直江津のまちを見渡してみると、かつて北前船が立ち寄っていた証を見ることができます。

例えば北前船がもたらした御影石や笏谷石が八坂神社や泉蔵院、五智国分寺や真行寺など、直江津のまち中のいたるところで目にすることができます。これらの石は船の喫水を下げるためのバラスト（重り）や商品として各地に運ばれていました。最近では笏谷石をまちなかで見つけると、うれしくなってしまうようになりました。

すっかりふるさとのことよりも直江津に詳しくなってしまったので、今後はふるさとの歴史やふるさとと直江津の関わりなどを調べてみたいと思っている今日この頃です。



こばやしまさきさん
昭和63年5月7日、長野県上田市生まれ。
新潟大学を卒業後、地元でしばしのんびりし、平成28年に上越市役所に入庁。
自治・地域振興課、観光交流推進課をへて現在教育委員会文化行政課
趣味は音楽と写真。
中学生までピアノを習い、大学時代はオーケストラ部でバイオリンを弾いていました。
たまに曲も作ります。
写真は職場の先輩の影響で一眼レフカメラを購入したのがきっかけ。

【2021】夏から秋へ なおえつうみまちアート

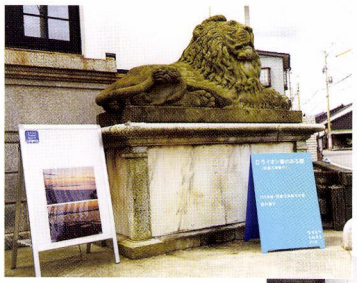
上越市・良品計画（無印良品）・頸城自動車で締結された地域包括連携協定を軸に、うみまちアート実行委員会を立ち上げ、「うみ／まち／ひと」をメインテーマに八月一日から九月二六日まで、五八日間にわたって、現代アートを直江津のまち中で展示する〈なおえつうみまちアート〉が開催された。

新型コロナ感染症の非常事態宣言や蔓延防止法が適用される中での開催というアクシデントや「現代アートってなに？」という様子見からか、オープン当初は出足が不安視された。しかし会期の途中で、うみまちアートのロゴを集めるスタンプラリーに直江津商店連合会が協賛し、ロゴの顔が完成すると土・日・祝日限定で五〇〇円券がもらえるとあって、家族で集めて食事に使うという思わぬ波及効果で人出が一気に増加、最終的に観覧者が二万人を超して終了した。

期間中、小中学生や作家仲間のコラボ企画が、エルマールや空き店舗を利用して開催されたことも観覧者増に一役買ったようだが、七〇〇〇万円近い予算を投じたイベントを次年以降につなげていくには、このような自主的な外側からの参加者を取り込む働きかけが必要だろう。

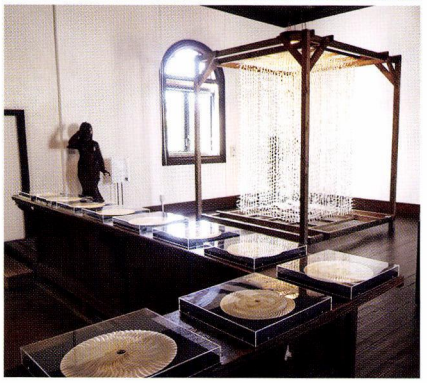


そらのみなと
船見公園周辺海岸会場・空間演出研究所



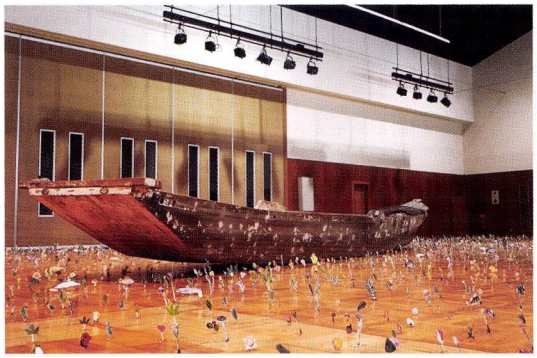
100年後の旧直江津銀行の姿
ライオン像のある館・西村優子



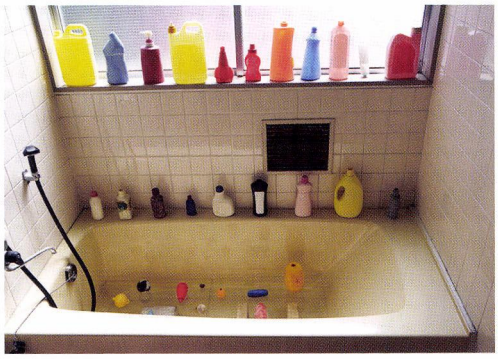




小さな屋台／移動案内所
渡辺英司



名称の海園／めいしょうのみその
直江津屋台会館・渡辺英司



A.b.in Naoetsu
青田真也





直江津アップサイクルセンター
安国寺通特設会場・GECLCHOP

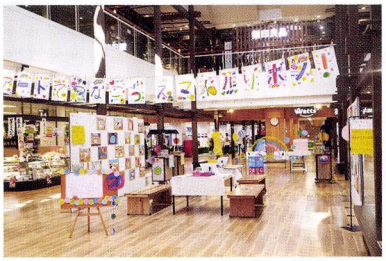




動く。動き出す。遊び。
安国寺通特設会場・松岡亮
（作者デザインのＴシャツを着てもらって
回収、一枚の布に仕立てる）

クジラ・直中美術部

コラボ





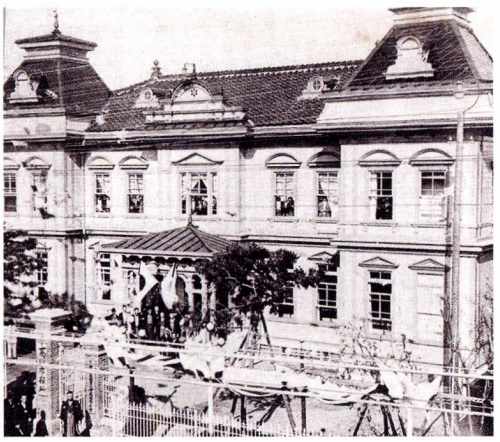




上 小学生もエルマールで
右 のぼり旗コレクション
左 かつて絵画を勉強した人達
の仲間展

高田・直江津合併　上越市発足五〇年

一〇〇年前に「上越発展策」を提言した人たち Ⅱ



高田市役所（竣工式当日）

本特集は、一〇〇年前に「上越発展策」をどのように考えていたのか前回に引き続き論述を紹介して、そこから五〇歳になる上越市の今を考えてみようというものである。

本稿の基にした「上越発展策」は、上越信用金庫内にあった上越産業振興研究所の依頼を受け、現代語訳したものである。目的が「どのようなことが書かれているのか」であったため、原文のニュアンスを損ないたくないものは「」でくくり、簡単な解説を付け加えた以外は大幅な現代語訳（北越出版・佐藤）をし、執筆者の中には意外な経歴を持った人物が多いので人物紹介を付して一冊（平成一八年刊）にしたものである。

なお、再録に当たっては訂正加筆し、紹介しきれなかった執筆者のプロフィールを長くなるのを承知で追加し、高田藩が輩出した人物群も探ってみた。

旧「高田市史」に「上越発展策」という別冊付録（復刻版では合本）がある。「高田市史」は明治四四年、高田中学校（高田高校）田川校長と教員であった布施秀治に編纂を委嘱して、高田開府三百年祭の翌年、大正三年に刊行された。

著者布施秀治は現頸城区両毛出身で、高田中学校に謙信文庫を創設し、後に東京帝国大学史料編纂所・帝室編纂局で「明治天皇御紀」の編纂に携わった人で、「高田市史」は刊行当時から地方史の手本と言われ、後の「直江津町史」とともに地方史の名著と言っても過言ではない。

「上越発展策」は、本編の倉石源蔵市長の序に続く例言に「…また、名士の論述にかかる上越発展策を別冊付録とせり」として、宮尾舜治・中村弼・風間萬次郎・関野貞・清水亘輝・竹村良貞・尾田信忠・竹内金太郎・春山泰治・金澤來蔵の一〇名によって執筆されている。

関野（せきの）　貞（ただし）（談）

工学博士・建築史家

慶応三年、五の辻で高田藩士の家に生まれる。

現在に至るまでの寺社の文化財指定、修復・保存方法を確立。また、朝鮮・中国の文化財調査も行い、現在でも韓国の文化財保護の基礎資料となっているという。

関野は、創建当初の法隆寺が「日本書紀」の記述によって再建されたものであるという説に対して、建築様式論から飛鳥時代の「高麗尺（こまじゃく）」を用いていることに注目して非再建論を唱え、再建論者の喜田貞吉などと論争を展開した。しかし、昭和一四年の若草伽藍の発掘やその後の建物調査によって再建されたものとして決着したが、非再建論者の平子鐸嶺とともに、建築年代を科学的に決定しようという手法は高く評価されている。昭和十年死去。

作品・奈良県物産陳列所（国重文）、（榊神社宝物館・雙輪館は子息克の設計）

市の概観

外から見た高田は杜である。上越の村落には樹木が多い。林の中に村があり杜の中に町があるようだ。ことに杉が多いのは土地が適しているせいであろう。日本中でこのように樹木に富んだ市街地はおそらく、そうはないであろう。一種の雅趣を帯びたこの杜のまちが好きである。

市街地に入って眺めると、なんとなく物寂しく、そしてすこぶる不潔である。雁木に統一性が無く、道は凸凹し、家々は古びてみすぼらしい。よそから来る人には、雪国の貧しいまちという印象を与える。

市街の構造

世界には寒冷地の都会、炎熱地の都会はあるが、高田のような積雪の多い都会はない。支那、朝鮮、西比利（シベリア）にも聞いたことがない。西洋に見るとすれば、瑞典（スウェーデン）、諾威（ノルウェー）であろうか。

西洋では建築学上、風・火・寒気に関する研究は進歩しているが、雪に関する研究は進んでいない。その中で、高田はまちそのものが世界で唯一の雪に関する研究所になってる。高田における雪に対する街の構造と他に比類のない進歩は、自然の要求と経験によるものである。

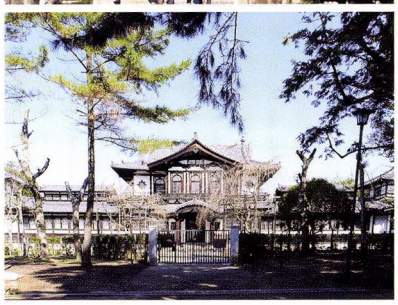
市街の要素の一つに人道と車馬道を分けることが必要であるが、人道と車馬道とを分ける高田の雁木は、有蓋人道として最も発達したものである。冬は雪、夏は暑、また雨を避け、雨雪の多い地方には大変便利である。

屋根に石を置くのは、北陸・山陰・東北一帯に見えるが、経済上の理由もあるが風や雪の落下を防ぐためであり、屋根の傾斜が緩やかなのもそのためである。また、平屋もあるが、市街が一様に二階建てなのも他ではあまり見られないことである。

家の向き

高田の市街地の街道が南北に長いため、家は南向き西向き





上　法隆寺
下　奈良県物産陳列所

が多い。家中（武家地）は南向きが多い。東京は南から風が入るので南向き、奈良・大阪は西から涼風が入るので西向きが多いが、夕日が入るので良いとは言えない。高田の夏は北風が入り、座敷はほとんど北向きである。庭園も北向きがいい、樹木や庭石の日差しの照りを見ることが出来る。

高田市に対する将来の希望

市街の構造に対する私の希望は、

一、市街の形状について市の大方針を決定する。従来のように街道に沿って細長くすべきか、どのように市街区を拡張していくかをあらかじめ見極めて定める。その立脚点は、積極的には市の繁栄策、消極的には防火と雪に対策である。

二、市の事業として、防火設備を建築学の専門家に委嘱して大方針を決め、新・改築には、その方針に従わせること。高田のような南風の多い所で、南北に長い市街は火災に弱い。あらかじめ防災区域を決め、防火壁あるいは防火家屋を建てるべきである。市役所・学校・銀行・会社・官庁などの建物を耐火構造にして火勢を食い止めることである。富山・高岡はたびたび大火に見舞われていたが、市街の主な部分を土蔵造りにして後、大火が減った。全部土蔵造りにしなくても、適所に耐火家屋があれば火災を最小限に止めることが出来る。従来、個人で防火用に土蔵を作ってはいるが、市全体で考慮していないのは残念なことである。

三、雁木は、多年の経験により設けられたものだから撤廃すべきではない（「雁木廃止令」が県から出されている）。大雪にはほとんど市の交通が途絶状態になるから、雁木撤廃説には賛成できない。しかし、現状は余りにも不体裁なので、右のように改良すべきであろう。

一、雁木は市の負担とする。

二、雁木の高さを全市同一にし、防火上、瓦屋根にする。雁木が高くなれば採光・通気が大変良くなるので、希望としては家屋を高くしたほうがいい。

三、雁木通りの幅は、六尺以上七尺とする。車馬道も幅を広げる。これは積雪時を考えてのことである。



雪の隧道
「雪の高田」えはがき

工業地としての高田

高田は商業地ではない。工業地として小製造業に適している。福井の羽二重、和歌山のネル、高岡の銅器、富山の製薬など先例を学ぶべきである。

教育地としての高田

今も教育上の小中心地である。将来わたって新潟・長岡に比べても教育の適地としての要素を多く持っている。

一、風俗　教育の適地として、その土地の風俗・人気（じんき）を考慮しなければならない。新潟は県庁所在地である他は、空気（雰囲気）がはなはだ良くない。長岡は不真面目である。高田は比較的人気質朴で、周りの空気も大変善良である。

二、歴史　人格陶冶には春日山がある。謙信公は教育において、崇拝の対象として長岡の河井蒼龍窟（継之助）の比ではない。また、榊原藩祖康政公は徳川幕府において得がたい人格者で、子どもから青年まで、崇拝に値する方である。

三、地形　鉄道が全通して、今では長野・新潟両県の中心地となった。ただし、風俗・歴史・地形が優れていても、実効が上がらなければ単なる空論に終わってしまう。高等学校問

題のように、中学の成績が少なからず影響してくる。

■高等学校問題　明治四三年、高田中学校友会の発会式席上、高等学校・官立学校への進学者が他学校出身者より成績が劣っているという指摘があって論争があった。

清水宜輝（談）

安政三年（一八五六）高田藩士の家に生まれる。

上京し大蔵省銀行員見習いに合格、第十五国立銀行に入行。明治三十年、国立銀行の廃止で㈱十五銀行取締役に就任。金融恐慌で倒産、私財を提供して負債に充てたため「公私混同ならぬ私公混同」と言われた。

金子伊太郎創業の上越電気㈱を引き受け、松本電気㈱を合併、中央電気㈱と改称して東京へ電力の供給を拡大。中央電気田口工場、日曹二本木工場を誘致している。

関野貞等と諮って郷土出身学生の寮の開設を計画、上越学生寮の基礎を築く。東京本郷弓町の自宅にも書生を置いて面倒を見た。小林古径もその一人である。

昭和九年死去、七九歳。寺町長遠寺と東京谷中に分骨。

作事長屋と呼ばれる足軽長屋で宜輝は生まれたが、大正天皇御大典記念に生地を買い上げ、教育目的で高田市へ寄付したが、彼の了解を得て大正一一年に高田測候所の用地となった。

市街の概観

市街の概観ははなはだ不潔でいかにも貧乏くさい。どこの土地でも本町は多少活気があるものだが、高田の本町通りには土蔵の家も無い。辻は狭く、ひとたび火災が発生すると大変なとこになる。また南北に長い街の作りは不経済であり、将来、都市改造の必要がある。

市況不振の理由

城下町であったために、現在の不振があると言うのは理由にならない。金沢その他の城下町の今日の活況を見れば分かる。高田の不振の理由をあげると、

一、生活しやすい土地柄であるため他所に比較して働かない。

二、有能な人材がいない。

有能な人材の多くが中央に出てしまい、地方に人材が乏しい。

歴史的に見て、高田人は引っ込み根性である。ことに金持ちがそうである。

米国の金持ちは―資産で気ままに暮らす―逸居を恥とし、また土地を買って私有することはしない。ひと財産得ればそれを資本に、また新しい事業を起こす「一資を得れば一商を起こし、一財を得れば一工を創む」の精神が、一代で何億もの資産を成す力になっている。

三、商業道徳が乏しい。

高田人は概して質朴ではあるが、往々にして「人気悪し」、高田商人に気軽に商品を送ってはならないという評判を耳にする。商取引の際の商業道徳を重んじないところから来るものと言わざるを得ない。

四、共同の観念が乏しい

市内に多数の銀行があるが共同一致して業務の改善を計るどころか、互いに激しい競争をして共に不利益を蒙っている。そのほかも推して知るべしである。

高田と工業

高田の将来は工業であろう。物価が比較的安く賃金も高くはない土地柄は、工業の立地条件を満たしている。ここに資

本を投下し、安い原料を供給して工業を起こせば大きな利益を得ることは間違いない。過去における失敗は、その方法に問題があったのである。

しかし、大がかりな工業（会社工業）よりも家内工業（問屋制度）の方が成功するであろう。

戸隠は信州の山間の一寒村ではあるが、各家々が競うようにして麻の畳糸を紡いでいる。製品は長野の商人が集荷して東京の市場で捌いている。このような寒村にすら産物があるのに、高田のような流通に便利な土地で、一つの産物も起こさないのは、右に列挙したようなことに起因しているのではないだろうか。

■畳糸　長野県鬼無里・戸隠・小川村の特産であった。国道四〇六号線沿いにある鬼無里村歴史民俗資料館併設の山国文化伝承館・山国文化伝習館で資料を見ることができる。

また、青海町が生んだ日本の大理石彫刻の創始者北村四海の作品が、父北村正信（宮彫刻師）の縁で展示されている。高田の宇喜世一階広間の欄間彫刻は四海の作品。



畳糸を紡ぐ（鬼無里ふるさと資料館）
麻糸の畳糸は鬼無里の特産品であったが、太平洋戦争後、米軍の指示で「大麻」の栽培が禁止され、衰退していった。

尾田信忠（談）

旧高田藩士の子として生まれる。高田中学から東京帝国大学文科卒業。

陸軍大学校教授、勅任官として幼年学校教頭となる。三笠宮、旧高田藩榊原政春も教える。上越学友会、上越寄宿舎（上越学生寮）の理事を晩年まで務める。

加納治五郎と懇意で講道館の理事も勤めた。「初等心理学」の翻訳者。

高田は物資に乏しく、師団の需要を賄うだけの蔬菜も不足して、師団は名古屋地方から供給していると聞いて驚いている。

私の思うところ、土地の産物と言われる物の中には、必ずしもその土地特有の産物ばかりではない。たとえば青森の苹果（りんご）は固有の産物ではなく近年導入されたものだが、今や青森付近の名物になり、有力な産業となっている。徳島の藍は蜂須賀候の尽力で特産品となった。十和田湖の鱒、諏訪湖の魚類などは、志のある人が私財を投じて魚類を他所から移入し、苦心の末に養殖に成功し、土地の特産品としたものである。土地固有の産物があればそれを、無ければ人為的に移入して特産品とする道を考えるべきである。

このような物産を産業として発展させるには学術的研究と犠牲的人物を必要としている。それをしないで、単に産業の不振を嘆いていても産業の興る余地は無い。

高田人の気風は、概して機敏とは言えない。これは裏日本の気候の影響であろうが、この気風は郷土にとって短所であると同時に長所でもある。教育者がそれを考えて教育すれば、初めは気が利かず敏捷性に欠けるようでも、後に大成する人物にならないとも限らない。たとえば同じ裏日本の山形

県は、近年教育力を入れてきた結果、どっしりとした強固な人物が出現する可能性が出てきている。

教育に従事する同郷の者に切に望むことは、「軽佻浮薄」になることを厳に慎み、気候風土と良く調和して「堅実強剛」な人物を排出することである。

■青森県のリンゴ栽培　明治八年、リンゴの苗木三本が試験用に植えられる。旧津軽藩士などの手によって試行錯誤が続けられ、二八年、京都博覧会に出品して好評を博す。三二年、県単独でロシアウラジオストクへ輸出。

■十和田湖の魚類養殖　和井内貞行が自費で魚影の薄い十和田湖に魚類養殖施設を作り、明治三六年、支笏湖からヒメマスの稚魚を移入して放流、三八年、遡上に成功。昭和二五年、大河内傳次郎主演で「われ幻の魚を見たり」として映画化。

春山泰治（談）

明治二二年高田中学卒業。弁護士。
前出の竹内金太郎と同期。

高田市の根本問題は人の啓発にある。その原動力は電気でも水力でも蒸気でもない。それは人そのものである。私は高田市民が精神および肉体の健全な活動を望むものである。

いかに資源が豊富でも、資金が乏しくなくても、これを活かす方法が良くなければ成功はおぼつかない。

天の恵みを利用して精神および肉体を鍛えなければならない。

文明の進歩は今や雪の征服時代が到来している。外国ではいかにして雪を利用しているか研究し、血で血を洗うように、「雪によれる弱点を雪をもって補うべし」。

金澤來藏

安政五年（一八五八）越後村上に生まれる。

第八代高田中学校長。大正元年福岡県立中学から赴任。本県の低学力を憂い、数々の提言と実行で英才教育を施した。大正四年の寺町大火に際して、校長の命を待たずに運動会を抜けて消火活動に赴いた四・五年生と、それを指揮した教頭と教諭とを指弾したため、同盟休校に発展、これをきっかけに校長の徹底した英才教育が是正されたともいう。

上越は「日本海の重鎮にして北陸道の関門」であれば、古来、英雄が抜きん出て隣国に武威を輝かせたのも偶然ではない。

ことに山に鋳、海に煮、また石油の湧出が有望視され、そして労働者の賃金は低廉である。物産の流通においては、東京、京阪、北海道、対岸の樺太およびシベリアにと、海陸の交通の要衝に位置していて大変便利である。このような上越は、文化においても商工業の繁栄においても、東北では群を抜き、東西の京、大阪、神戸と競ってもおかしくないはずであるが、事実は全くこれに反している。

全国各都市の統計を示すまでもなく、県内の所得税の比較をみると次のようなる。

所得税郡市別調（原文から一部抜粋）明治四四年新潟県統計

郡市	人口	所得税	一人平均	順位
長岡	三七、二七九	一四六、一六二	三、九一九	一
新潟	六四、九九〇	一〇八、一七八	一、六六四	二
高田	二九、二九六	三六、七二一	一、二五三	三
中頸城	二一三、〇八六	八四、九五四	三九八	一〇

これを見ると、高田市は県内三市の最下位で、長岡の三分

の一弱、しかも、非生産的な狭斜の地（遊里・花街）で広く知られている新潟市にも及ばない。北蒲原・刈羽の九一銭に対して中頸城は三九銭に過ぎず、東西頸城郡の各三〇銭にも達していないのは、上越の貧寒窮乏を物語っているものであろう。

山海の産物が豊かで交通の要衝という地の利がある上越がこのようであり、しかも工業は振るわず、事業が興らない。わずかに農業で生計を立て、生活は中以下というのは、ほとんど余裕が無いということである。

幸いなことに新潟県全体として見れば青森・盛岡のようではないが、上越地方がほとんど青森・盛岡のような惨状に似ているのはどこに原因があるのだろうか。左のようなことが考えられる。

一、深雪地帯であるため農業が主体であり、一年の三分の一は「遊手徒食冬眠的生活」をしている。

二、古来、天候に圧迫され、反発・進取の気概に乏しい。

三、勤勉ではなく、時間を大切にする気持ちが薄い。

四、河海の利用をおろそかにしてきた。

五、財源となる資源が無く、単調である。



第十三師団は大正２年から２年にわたって満州へ出兵したため将校の家族が帰郷し、市の税収や商工業者が大打撃を受けた。師団が帰還したときの歓迎ぶりは大変なものであったという。

第一について、これは上越のみではなく東北地方は、雪に閉ざされてその間に西南の地方（西日本）に先を越されてしまい貧窮を極めることになる。

上越の発展策は数々あるが、農業を重視すると同時に商工業を奨励しなければならない。ことに商工学校を新設して金工・木工・漆塗・漆業の改良を行い、加えて窯業・機械の科目も開くべきである。大分県の別府は単なる温泉地で、旅行客はみやげ物さえも買えなかった。しかし十数年前、工業学校を開設してから、いろいろな物産が現れて、まちは大変にぎやかになった。

先ほどから述べているように海陸交通の要衝である上越においては議論の余地が無い。その地を高田に「卜し」、充実した工業高校を開校すれば、頸城三郡の繁栄を促進することは間違いない。

第二、第三について、進取の気性を育て、勤勉で時間の観念を持つ気風を育てるのは主として教育者の力量によるしかないが、公私各種会合で時間の厳守の規約を設けるなど、郡市当局、有識者は率先して奨励すべきである。また、高田開府三百年祭で行われたように、名士・有識者を招いて講演会を開くのも有効な方法である。

第四について、後述する。

第五について、地域の収入源を単一の物にのみ頼っていると大きな弊害が生じる。たとえば農業のみに頼っていると、一たび凶作に見舞われた場合、数十いや数百万の人達が凍え飢えに瀕することになる。「殷鑑遠からず」、その例は手近の青森・岩手にある。東北の各県が農業にのみ頼っていないで商工業に力を入れておけば、津波（明治二九・三陸沖の地震津波）や旱魃、冷害を蒙っても、県外に救助を仰ぐような惨状には至らなかったはずである。

九州の筑前には炭鉱、筑後には農業・林業・機業・指物

細工、酒造、傘、下駄、足袋、子供の玩具に至るまで、その物産は数えきれない。日露戦争前の筑前は不景気のどん底にあったが、筑後はその影響を受けることはなかった。顧みて上越の収入源は米穀のみである。強いて他の物を挙げるとすれば「バテン」のみである。もし水害や旱魃、冷害で凶作に陥ったら、また海外市場が不況になれば、数十万の農民と数千のバテン業者が坐して飢餓に泣くことになる。

師団（十三師団）兵が、ここ一両年渡満（満州出兵＝中国東北部）しただけでも高田市が不景気を嘆くのは、収入源が少なく、広範にわたっていないからである。

上越および新潟県の発展を促進するために、次のようなものを奨励すべきである。

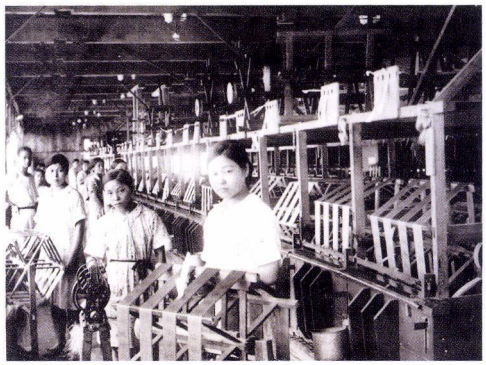
①機業
②白桐・果樹・竹林の植林
③モヤシ・椎茸の栽培
④菓子・ジャム類の製造・改良
⑤郷津湾の築港および河川の利用
⑥指物・火鉢・下駄などの桐細工
⑦金物・医療機器製造
⑧漆器・竹細工
⑨碁盤・碁石の製造
⑩雪の貯蔵、雨具の製造
⑪造士（人材）の育成
⑫物産陳列所の開設

機業の奨励　日本海の湿潤な気候が機業に適しているのは、まさに天の恵と言うべきである。栃尾・小千谷・十日町はいずれも機業で世に知られており、桐生・足利などは、いつか織物業が越後に移ってしまうのではないかと憂慮していると聞く。賃金が安く、湿気が多いことでは桐生・足利を凌いでいるのに、上越に機業が起こらないのは、自ら天の恵みを棄てているに等しい。

白桐・果樹・竹林の植林　白桐の栽培に関して県下の三大新聞の新年号に、愚考を投稿したところ、数通の賛成の感想を寄せていただき大変意を強くした。県下の事業家は竹林栽培に関してもっと考慮すべきである。果樹栽培については、すでに始められているというので、あえて述べない。

モヤシ・椎茸の栽培　上越は農業偏重であるにもかかわらず、冬期間は野菜類を名古屋方面から中央線を経由して買っている状態である。これではますます貧窮に陥る原因である。大豆を盛んに植えてモヤシを栽培し、冬期間の食用にすべきである。熊本県は温暖で二毛作に適する気候であるにもかかわらず、なおもモヤシを栽培して近県に出荷しているではないか。

高田中学では寄宿舎で舎監の指導の下、生徒・小使・炊事夫と共に協力して栽培し、朝夕の食膳に供している。これに倣って一般農家も栽培すべきである。ことに直江津では「本所公（榊原政令）の故智」を見習って海岸に防風林を造りモヤシを栽培し、近県、東京・横浜をはじめ京阪神に出荷して利益を挙げるべきである。



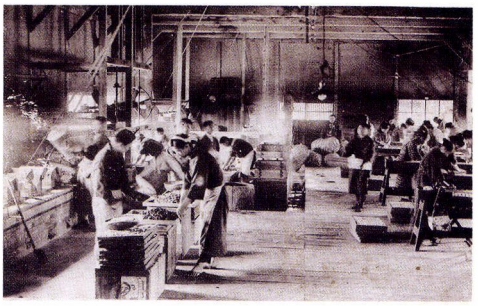
高田製糸
明治28年創業、大正9年に長野県岡谷の小口が買収して、いち早く蒸気機関を導入して生産が飛躍的に伸びた。
この写真の昭和8年（越佐大観より）頃で300人を超える従業員を数えたという。

椎茸は乾燥させれば一年中保存がきくので冬期間の食料に適している。また大陸貿易の物産にもなる。

菓子・ジャム類の製造・改良　高田の翁飴、熊本の朝鮮飴は旧藩時代より有名であるが、今日、飴菓子は全国至る所で製造され、少なからず翁飴や朝鮮飴よりも優れている。一方で高田の菓子商は旧態依然として新機軸を出していないのは残念なことである。

越後には古来、柚餅子が有名である。福島柚餅子、糸魚川柚餅子があるが、前者は腐敗しやすく、後者は乾燥しやすい。柚餅子は酒、お茶どちらにも良いが、ことにビールには大変良い。先の問題点を改良して保存に適するようにすれば、販路には事欠かない。高田、糸魚川の菓子商は一段の改良を進めるべきである。

上越としては、イチジクは果物のなかで唯一の特産物であろう。肥料・労力があまり必要でなく、そのうえ収穫量が多い。東北地方のイチジクは熱帯地方のバナナのように、天の美禄と言っても過言ではない。ことにジャムには最適である。東北地方はイチジクを栽培してジャムを作り、菓子にして一大産物にすべきである。



関野商会
大正７年～昭和７年の間に発行された絵葉書
柏崎の煎餅職人関野栄吉が、高田に十三師団が設置されたのを機に、高田で関野商会を創業。
うおにしき、スキー煎餅などを売り出し国内外に出荷された。

果物は外国人・都会人のよく好むところであり、果樹を多く植え、輸送方法を研究して生のままで東京・横浜、京阪神地方に出荷すれば、大いに利益をもたらすはずである。

郷津湾築港および河川の利用　郷津湾が風浪を避けるのに適しているのは、万人の認めるところであり、築港論が提唱されて以来すでに三十年、未だに起工されるどころか、空論にのみ時間を費やしている。富直線（北陸本線）の全通後、直江津の繁栄は全て伏木港に奪われて、地価は暴落、一、二の銀行がきびすを接して窮状に陥り、さしも一時全盛を極めた直江津も「荒涼凄絶」の一寒村に変わろうとしているではないか。

いやしくも上越の知名人・有識者たる人々は、懐手をして事態を傍観しているときではない。一致団結して「郷津湾築港期成同盟」を設立し、県下の世論を喚起すべきである。もし手をこまねいていると、直江津のみならず新潟県の繁栄は全て富山県に移って二度と戻ってこないであろう。

上越は池沼湖水が少ないが、河川は少なからずある。長野県のような山国でも通年、鯉を出荷している。上越の水田は鯉やドジョウの養殖に適している。また、荒川（関川）、保倉川、矢代川、姫川、飯田川、渋江川などの川に魚類の養殖に



「毛抜き」のうぶげや（昭和８年刊「越佐大観」より）

最適な川がある。ことに直江津は、村上のように鮭鱒を人工孵化によって養殖し、鉄道を利用して秋冬の漁獲の少ない時期に全国に出荷すれば、直江津の一大産物になることは間違いない。

指物・火鉢・下駄などの桐細工　箪笥、長持、文箱、下駄、足駄など桐細工品の需要は無限にあり、桐材が不足して大陸から輸入し、年間数百万円に達していることは業界のよく知るところである。

新潟県は佐渡が桐材の産地であり製品も北海道へ出荷していた。しかし、細工が未熟なために販路を失いそうになったとき、東京から技術者を呼んで板の継ぎ合わせなどの講習を受けて信頼を回復している。上越でも講習会を開き指物師を保護奨励すれば、上越の有力な物産となり得る。

金物・医療機器製造　高田の「毛抜」は全国に知れているが、これは金工の技術が優れているからであり、この技術で小刀・鋏・包丁・フォークから医療機器を製造すれば、堺、奈良と共に金物の名産地となるであろう。ことに高田は名医が多く、遠く富山・長野・群馬から来て治療を受けている。この医師達が医療機器の製造を金物業者に指導すれば、高田は医療機器の名産地になることは決して難しいことではない。

漆器・竹細工　傘、提灯はすでに高田で生産されているが、扇子、団扇、籠類を製造して東京、北海道へ出荷すればよい。

明治四四年の新潟県の統計（統計表略）によれば、県下の漆器製産額は三五万七千円である。県下の生産地は、新潟・長岡・高田・柏崎・村上であるが、高田の生産額が六千円に過ぎないのは、地元産を馬鹿にして買わないのか、生産者が怠慢なのか、市の保護奨励が足らないのか。一年の三分の一を風雪に閉ざされ戸外の作業に適さない地方は、漆器業を決して疎かにすべきではない。石川県では生産額が百万円に達しているのを見てもよく分かることである。

弓矢は半ば漆芸で半ば竹細工である。

射芸（弓道）は、老幼強弱問わず出来るため、近年、学校で男女共に採用されてきている。大日本武徳会（明治二八年、武道の振興教育を目的に設立。敗戦後も組織を変えて続いている）もこれを奨励している。武道を重んじる地方では、青年から老人まで、盆踊りや草相撲以上に盛んであるが、製造方法はわずかに京都、鹿児島などに伝わるのみである。昨年、富山・金沢・福井を旅した折、弓矢を買おうと試みたが「矢を作（は）ぎ、弓を造る」家は一軒もなかった。新潟県も同様である。それならば古の英雄の根拠地、春日山下で弓矢を製造し、関東・北陸へ出荷するべきである。

碁盤・碁石の製造　私は三十年来、日本全国ほとんどの土地へ足を運んだ。そしてどの土地でも囲碁の有段者が星のごとくいて、よく見ると専門家もいる。高田においては数名の有段者がいて、なかには三、四段の者もいる。これは大変喜ぶべきことであり、このうえ碁盤・碁石を製造すれば高田振興の一助になるであろう。

日向国は古来カヤの木の産地であったが、大阪の商人が入り込んで碁盤用のカヤ材を買い尽くしてしまったため、今は飛騨、佐渡が産地になっている。材料をどこから持ってこようと高田は海陸交通の便が良く、賃金も安いので、郡市の囲碁愛好者と市当局が少し考えを廻らせれば、高田名産とすることは全く容易なことである。また碁石の原石を得ることもそれほど難しいことではない。

雪の貯蔵、雨具の製造　越後は開闢以来雪に苦しめられてきたにも関わらず、その利用方法を考えてこなかった。炎天下の高田で雪を得ようとするのは、炎天下の東京で得ようとするよりも難しい。これは貯蔵方法を考えて来なかったからである。科学が進歩して冷蔵庫・冷蔵車・冷蔵船が出来て、氷雪の需要が年々増加している。もし雪を圧縮して貯蔵する

方法が発明されれば、雪も高田の資源となるであろう。これは市が率先して研究に取り組むことを希望する。委員会を設けるのもいい、懸賞募集もいいであろう。

日本海側の雨量は太平洋側の四倍にも達し、年中、雨・雪に苦しめられているのにも関わらず、雨具の改良工夫を凝らして来なかった。近年不完全であるが防水布が開発されてはいるが、それらの多くは他県のものである。必要は発明の母であり、日本海側ほど雨具の必要性が高い地域はない。高田中学で「六百の健児の便利を図り」雨具研究委員会を設けて研究中である。しかし、ことは一学校の委員に任せておくべきものではなく市が率先して研究し、東洋随一の雨具生産地にしなければならない。

造士（人材）の育成　地方・国家発展の原動力は、優秀な人材の育成にある。それは世界各国同じである。維新当時の我が国においてもそうであったし、薩摩・肥筑・加賀・信濃を見てもそうである。上越の発展を考え、大新潟県を期すには人材の育成のほかない。

人材育成のために、教員を優遇して初等教育と中等教育の振興する、高等学校を新設する、学資援助の道を講ずる。これらのことは一日も怠ってはならない。

薩長は早くから高等学校を興し、福岡は大学を設け、岡山・愛知も競って高等学校を開設しているが、いずれも地方の有力者が、新設のための費用を甘んじて負担して来た。

新潟県は明治初年に官立の諸学校、師範学校があり、県立新潟英語学校および多くの工科学学校があって、当時は北陸の最高学府であった。ところが、その官立学校は廃止され、英語・科学学校は無くなり、急転直下非常な退歩となってしまった。今や文化程度は先進的な県（雄県）から十数年の遅れをとってしまった。これには数々の原因があるが、一つには高等学校の設立を疎かにしてきたためである。確かに時々思い出したように高等学校の設立を計画するが、持続性が無いために、徒労に過ぎない結果に終わってしまう。

百九五万県民、一二の県立中学校、年々輩出する五百の卒業生がいながら、一つの高等学校をも有していない。高等学校志望者は金沢、仙台、東京へと受験するが、至るところで不合格の憂き目にあい、多くの学生は学問の迷子となっている。しかしそれを憂える人は少なく、そのために人材の欠乏と地域の萎縮と荒廃を招いている。

かつて、上越の有識者たちが高等学校新設を企画したことがあったが、地域感情から妨害した者たちがいたと聞く。このような妨害行為は許せないのは言うまでもないが、妨害された側が、むざむざと中止し、なおかつそのことを忘れ去ってしまっているのは、いかにも解しがたいことである。

明治二〇年頃、信濃川河身（ママ）改修工事のために約六百万円、明治四〇年起工の大河津開鑿（大河津分水）に約千三百万円、その工費合計千九百万円の内の約半分を県費で賄うことに全県で快く応じ、一つの異議も立たなかった。

右のことを考えれば、県が高田に高等学校を一つ設立することぐらいは当然の義務であろう。まして、新潟医学校が大学に、長岡工業学校は大学または高等工業学校になる方向があることを考慮すれば、高田に高等学校が新設されるのは当然のことであり、他の地域の羨望とはならないはずである。上越の有識者を自認する人達は、期成同盟会を組織して一日も早く実現させるべきである。

愛知県では、当局に三〇万円を寄付して第八高等学校の誘致に成功した。我が大新潟県において三〇万円、百万円など如何ほどのものであろう。要は上越の有識者諸氏の熱意あるのみである。

人材育成の急務であることは、上越の有識者によって出された「奨学会趣意書」に譲るが、高田市当局に望みたいこと

は学資支給制度である。次に、内務省参事官井上法学博士の説を紹介する。

自治体と英才教育

近代の教育方法は、余りに組織的（画一的）に流れ、英才教育に関してはほとんど意を注いでいない。英才教育の必要性は、早くから英国で着目していたことである。英雄豪傑に子孫が少なく、いわゆる—人種の善種—優秀な血統が減少するなかで、英才を下流の大衆社会から選択して、自治体が—学資を支給して—教育すべきであるという主張に対して、イギリス政府は率先して取り組んでいる。自治体の学資支給については、「帰郷して郷里のために尽くす」という条件を付けて実施している。国内でもこのような方針で実施している自治体もある。これは時宜合った方針であると信じている。（「越佐教育雑誌」大正三年一月刊による）

英国のみならず、欧米諸国でも公費または個人団体で学資を支給して英才を養成している。現に我が国においても、薩長、筑豊、加賀などの先進的な県では、県、郡市、個人団体で学資を支給する制度が備わっている。

我が国の一大発明家である工学・薬学博士高峰譲吉（タカジアスターゼの考案など）は、「畳一枚の広さの上にある空気から四千貫くらいの窒素肥料が得られる。一平方里の面積の上にある空気から、この窒素肥料を採ることが出来れば、二〇億の我が国の外債も瞬時に償還できる。スウェーデン・ノルウェー・ドイツ・フランスでは盛んに行われている。日本は天然の地形を利用して電気を得れば、前途有望である」と語り、数千万円の資金を募って東洋理科大学建設を計画している。

その高峰博士は学生時代、加賀藩から学資の支給を受けて修業した人である。外交界の功労者小村寿太郎侯爵は、日向飫肥藩の貢進生（藩費で修業する学生）だった。

もし、飫肥藩と加賀藩が二人に学資を支給しなかったら、「帝国は空しく一大外交家と一大発明家とを埋没したりしならん」。

県は県費で、郡市は郡市費で、個人団体はその資金で二重三重に英才を教育することが、目下の急務と考える。高田市が英才教育費として年間四、五百万円を投じて、他の郡市にその範を垂れることはできないものか。

物産陳列場　地方繁栄の源泉は人物と産物にあると述べてきたが、これに次ぐものは景色（観光）と由緒ある神社仏閣である。しかし、これは求めて得られるものではない。一、二年の間にその実を挙げるには物産を集散することである。幸い高田は「北陸道唯一の関門」であり、新潟、富山はもちろん金沢、福井の往復も高田に寄らなければならないので、高田駅前に物産陳列場を設け、北陸、北海道、長野県の一切の特産物を置いて販売すれば、多くの旅客が下車して土産を購入するであろう。

旅館の宿泊料が直江津は一円五十銭、新井は一円であるため、直江津で泊まるべき旅客が、わざわざ新井で泊まるという。もし、高田に陳列場を設け、宿泊料金を安くすれば、善光寺参詣客の少しは、高田に誘導することは難しいことではないであろう。

中越の織物、燕の銅器、佐渡の朱泥、村上の堆朱、新潟・柏崎の漆器、長岡・村松・新発田の菓子類はじめ、富山・高岡・金沢の漆器および銅・鉄器を集めて陳列すれば、高田はまさに北陸道の物産の「広告場」になる。市が独力で建設するのは大変な負担になるので、その一部を県費に仰ぐのも的外れなことではないと思う。これは高田百年の計であり、その建設を急がなければならない。

以　上

開府三百年祭の開催、市史の編纂、上越発展策の募集、商業会議所の設立等々、地方発展のために鋭意努力している市当局に対し、深く感謝し信頼しているからこそ、私は半月の間、睡眠、食事の時間を割いて心血を注いで―高田市および頸城三郡の発展のための十二策―を書き上げたのであり、それも高田を愛するためである。

郷津湾築港、高等学校の設立、物産陳列場の建設の内の二、三策でも、地域の有志によって実現することになれば、大新潟県の振興にもなる。これは上越の有識者が立ち上がるか否かにかかっている。

世間では日本海沿岸を東北あるいは裏日本と、軽蔑するように称しているが、文化程度が幼稚なだけで幼稚ならば成長の希望もある。つまり、本県ことに上越において未開発の資源が残されているのは幸いと言うべきである。

日本海を裏日本と軽蔑するのは文化のことを言っているのであり、ヨーロッパにおいて、地理的に見れば地中海沿岸諸国が表ヨーロッパであるが、文化の表ヨーロッパはイギリス、ドイツではないか。

我が国を見れば、九州の福岡、長崎は裏九州と言うべきであるのに、太平洋に面した宮崎、大分を裏九州と言って軽蔑し、福岡、佐賀などの日本海沿岸各県を表九州として敬意を表するのは、文化の程度によるものである。

一日も早く郷津湾を築港してヨーロッパ・アジアへの最短の港とし、大学の予科である高等学校を高田に新設し、新潟医学校を大学に、長岡工業学校を大学または高等工業学校とすれば、裏日本は一変して表日本となるであろう。

昔から預言者は、故郷には受け入れ尊ばれないものである。郷党の諸氏よ、縷々述べてきた私の言葉を「狂となすや否や」。

■鋳山煮海　ちゅうざんしゃかい・しゅざんしゃかい　史記・呉王伝（ごおうひれつでん）　呉王〈ひ〉は、漢の高祖劉邦の兄劉仲の子、呉の国王となる。呉王〈ひ〉は、亡命者を募り、密かに銅山から銅を掘り出して銭を鋳、海水を煮て塩を作ったために国家財政は潤い、課税する必要がなかった。漢和辞典等に見えるが、その意味は記されていない。山海の資源が豊富という意味か。

■殷鑑（いんかん）遠からず　「詩経　大雅・蕩」　諫めとすべき失敗の前例。殷が鑑とすべき手本は遠い時代ではなく、悪政で滅んだ夏（か）である。

■高田開府三百年祭の記念講演　慶長一九年（一六一四）高田築城から三百年目にあたる大正二年九月十日から一週間、東本願寺前法主による歴代藩主法要、各寺院の宝物展、写真展はじめ各種展覧会、物産展、各国児童の作品も含めた作品展、花火大会、飛行機の演技飛行、各種演芸会、提灯行列など、空前の規模で開催された。講演会は、大隈重信早稲田大学総長、浮田和民早稲田大学図書館長、市島謙吉・竹村良貞代議士、弁護士春山泰治、佐藤壮太郎、医師瀬尾雄三、官僚宮尾舜治などの講演会が行われた。

■朝鮮飴　肥後熊本の名産。求肥飴。当初は長生飴と称していたが、文禄・慶長の役で加藤清正が軍陣に携行させたため、この名前がついた。

■写真

新潟県写真発展号　大正四年
現代越佐大観　昭和八年
北越出版蒐集絵葉書

■参考資料

訂正越後頸城郡誌稿
大正三年版　高田市史
昭和三二年版　高田市史
新潟県人物百年史
上越市史　通史編5

府中の宴――〝瓦灯〟を素材として――

小島幸雄

一〇月のある日、歴史博物館で開催された「上越のみほとけ―「越後の都」の祈り―」をご覧になった後、釜蓋遺跡ガイダンスに私を訪ねてくれた方の言葉が、博物館に展示されている伝至徳寺遺跡から出土した瓦灯に関する質問だった。「瓦灯」って何ですか？　弥生時代と古墳時代の展示に限られるガイダンスにいても質問はいろんな時代の出土品に及ぶが、ピンポイントで瓦灯の質問を受けるのは初めてだったので、いささか面食らった。話は多岐に及んだが、ここでは瓦灯について答えた概要を記すとともに、府中の宴について考えてみたい。



瓦灯二点と風炉の写真を載せた。瓦灯は形態が異なるが並べてみるといずれも梵鐘型であることが明白だ。片方が線刻と花びらの透かし彫り、もう一点はイチョウの葉が透かし彫りされている。風炉とともに茶席で使用されたと考えられる。

瓦灯

先ずは瓦灯の話から始めよう。瓦灯は、その文字が示しているように灯の道具である。現代では様々な形の灯の道具が使われているが、ここで紹介するものは、中世の茶席で使用されたと考えられるものだ。構造から考え、どのような灯を作り出していたかをお話ししたいので、ここではその概要を記すこととしよう。

その前に、刊行されている書物で瓦灯がどのように概説されているか一例を示すと、「歴史考古学大辞典」には、「土製の照明具。素焼きの行燈で、油受けを置く身と釣鐘型の蓋に分かれ、蓋に設けた横窓で明かりの向きと光量を調節できる機能をもつ。（中略）菜種油などの燈油が増産された戦国時代に普及し、（中略）手あぶりの火鉢と同じ瓦質土器で焼かれることが多く、戦国時代は都市・城館・寺院跡での出土が確認される。（後略）」とある。それでは、写真の瓦灯を詳細に見てみよう。

出土した瓦灯のうち形のわかる二点を比較してみる。まず共



線刻の瓦灯を拡大した。築山が描かれ、幹は根元付近から二本にわかれ、さらに左は二本にわかれている。枝先は垂れ下がり花を付ける。

通点を列挙し、その後個々の特徴をあげていきたい。

① 辞典にあるように、瓦質土器と呼ばれる火に強い焼き物である。

② 外観は釣鐘型である。

③ 胴の下半分に外観と同じ釣鐘型の切込みがある。

④ 胴の上、中、下の三本の凸帯は本体の成型後に張り付けたものである。上帯・中帯・下帯を表現したものであろう。

⑤ 写真にはないが、油受けを置く身の周囲は、一部が蓋の釣鐘型の口より少し大きな山形に立ち上がっていて、蓋を回すと山形の立ち上がりが胴の釣鐘型の穴を徐々に塞いでいき、光量が調整できるようになっている。

次に示すのは個々の仕様である。

（乳）・外観で釣鐘型とわかる乳のあるものは、沈線による線描がない。

・乳は四段三列である。

・天井の肩に二等辺三角形を逆さにしたような切込みがあり、等辺の二辺の線は内反りになっている。イチョウの葉を表現したと考えられる。

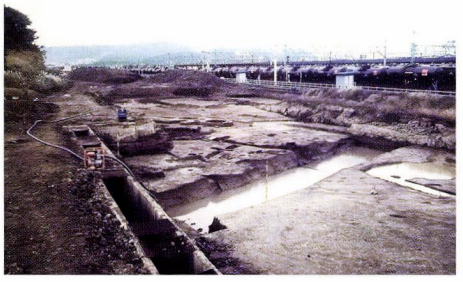
（線描）・五弁の花びらが表現され、花びら一枚一枚がハート形をしている。割れ方から胴は五段の帯状粘土で積み上げられている。

発掘当時、二点の瓦灯に豆電球を入れて灯がどのように周囲に行き届くか実験したことがあった。胴を塞いでみたところ、瓦灯天井の花びらとイチョウの葉が部屋の天井に映し出されてとても風情があり、春の灯・秋の灯と呼んでいる。

この二点の瓦灯は同じ穴ではなく近接する二か所の大きな穴から出土したもので、どちらの穴も見つかったときは黒い土が円を描くように線状になっていた。黒い帯の中側は褐色のきれいな土で蓋をしたようになっていて、褐色の土を掘って真っ黒な灰混じりの土から出土したのだった。灰混じりの土は、明らかに火事場整理のための穴で、火事場のごみを入れるためだけに使用されていた。褐色の土はごみ穴であることをカモフラージュするための蓋だった。そして、一緒に出土した風炉もとても大ぶりで畿内で作られたものであるといわれている。写真には一面しか写っていないけれども、反対側にも窓が開いているがその窓は天井をむいていて客人に炭の灯が直接目に入らないように作られていた。写真の部分は茶を点てるときに手元を照らすように肩から胴にかけてあけられていたので、心憎い配慮だと感心した記憶がある。そして、この二か所の穴から出土した陶磁器によって、伝至徳寺遺跡が全国に知られることになり、貿易陶磁研究会の大会もリージョンプラザ上越を会場に開催されている。



濠の調査風景だ。人が入って発掘しているので、その規模が想像できると思う。濠底近くなると水がたまって足がとられ、田下駄のように板を浮かべて調査を行った。



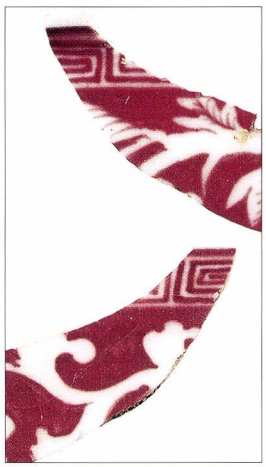
斜めに水が溜まっているのは幅が６ｍもある濠の跡、中央奥の貨車の手前の黒い土の山は14号遺構から掘り出された灰混じりの土だ。この黒い土から高級陶磁が出土した。

発掘当時の写真を示した。左側の排水路から少し突出している右手に見える黒い穴が十九号遺構、貨物列車の手前に見える黒い土の手前が四号遺構である。全く同じ埋められ方をしているので、前述のように火事場整理のために新たに掘られてゴミが充填され、穴から掘りあげられた土で蓋をしたと考えた。

饗宴の場

では、これらの瓦灯と同じ穴に廃棄されていた出土品を見てみよう。以前にも紹介したことがあるが、確かその頃はモノクロの誌面だったので今回再度掲載した。いま、これらの出土品は上越市埋蔵文化財センター（春日山町一丁目）の企画展で展示されているので、ぜひ美しい中国製の染付や青磁をご覧になっていただきたい。





元染付と呼ばれるもの。中国の元の時代に焼かれたもので染付の最高級品と評価されている。右一列を除きすべて同じ個体で、粉々に割れていた。上段右から二番目の破片が威信財発見のきっかけとなった。左の２点は釉裏紅だ。

ここで紹介するのは焼き物そのものではない。その焼き物がどんな意味を持っていたかということである。平成一〇年に開催された「陶磁器の文化史」という展覧会の図録の一一四ページの「越後・伝至徳寺」を引用してその意味を紹介したい。

「伝至徳寺は、越後府中にあたる直江津地区で発掘された一辺二六〇ｍの濠で囲まれた遺跡である。「至徳寺」は、越後守護上杉憲将の菩提を弔う寺院で、その塔頭長松院は、上杉氏が賓客をもてなす迎賓館的な機能を持っていたとされている。これは一五世紀後半の火事場整理の大きな穴からまとまって発掘された、大量の美術陶磁の一部である。

それは守護上杉氏にふさわしい、唐物天目茶碗や青磁の骨董品を中心にした定型のセットと新たに流行していた元代の染付や釉裏紅の高級陶磁を含む。また、畿内産の風炉や桜の描かれた風雅な喚鐘型の灯火具など、当時の戦国大名クラスの所有する威信財としての陶磁の実態を示している。」

私の言葉足らずの解説を記すよりも、伝至徳寺の火災時の出土品を端的に表現してくれている図録の解説を紹介した。釉裏紅は、出土した当時「伝製品を含めても国内随一の発色だ。」と言われるほど美しいものだと評価していただいた。

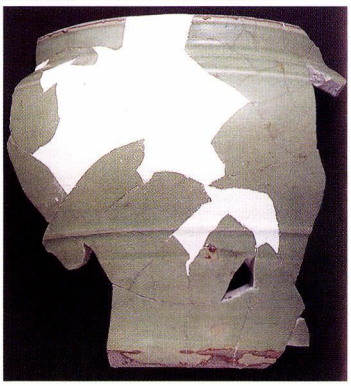
さて、これほどまで評価の高い陶磁がなぜ伝至徳寺から出土したかというと、至徳寺が越後上杉氏の館に近接した寺院であり、迎賓館であったことに他ならない。冒頭に紹介した瓦灯と風炉は賓客をもてなすときの道具だったのだ。

堀に囲まれた館は守護所か

写真には水のたまった部分が斜めに写っている。これは堀の跡で、幅六～八ｍを測り、更正図なども参考に復元すると、約二六〇ｍ四方の区画に掘られた堀であることが分かった。

二か所のごみ穴は、堀から一〇ｍほど離れて掘られていてその間には土塁が築かれていたであろうことは容易に推測できる。





元染付が新しく登場した中国製高級磁器なら、青磁は戦国時代以前から続く骨董的な高級磁器である。

そして掘られた場所が土塁に近いということは、土塁に近接する部分は建物を建築する必要のない場所だったということになる。火災の原因は明らかにできないが、この火災以降二六〇mの堀で囲まれた中世越後最大の館はその機能を失っていったと考えられている。

では、この越後最大の館は何だったかというと、越後守護の館、「守護所」と考えるのが大方の判断だ。前出の陶磁は、図録の解説でも「戦国大名クラスの所有する威信財としての陶磁」と紹介されている豪華なもので、一五世紀後半の最高級のセットである。一五世後半といえば上杉房定が守護として越後府中の繁栄が最高潮に達した時期とされ、時の管領細川政元が越後に下向したときに房定が饗応している。政元の下向については、矢田俊文氏の研究があるので（「守護所から戦国城下へ」所収報告など）参照願いたい。氏の研究によれば、政元の下向に際し越後府中での宿所を提供し饗宴を催したのは房定であり、宿所は国府至徳寺長松院とされる。宿所は守護館とは書いていないのである。

ところで、至徳寺の位置をこの発掘調査で限定できなかったが、「至徳廿内」と墨書された天目茶碗が出土しているので、それを手掛かりに堀で囲まれた区画と周辺を推察する。この天目茶碗が出土したのは、駅南のセブンイレブン辺りで、濠に囲まれた区画内ではないから、「至徳」と限定する遺物の出土はその出土地に文字の意味を見出す必要がある。そして「至徳廿内」とは至徳寺が所有する茶碗のセットが廿個一組だったということを示している。

これらを総合して判断すると、四号遺構と十九号遺構から出土した豪華な陶磁セットが戦国大名クラスの所有物として評価されるものであったわけで、それに対してこの天目茶碗は至徳寺そのものを示唆していることになる。このことから、二六〇メートルの濠区画は守護所、そして館の南西に広がる地域が至徳寺であったということになろう。

横曽根Ⅰ遺跡と府中

ところで、今回のテーマを執筆するために以前調査した遺跡の出土品を実際に見学させていただいた。伝至徳寺の遺物は前述のとおりであるが、記憶にある中で至徳寺に似た威信財を所有していた遺跡があった。遺跡は横曽根Ⅰ遺跡という。横曽根集落の北側で調査された遺跡は、至徳寺で出土していた青磁酒海壺や盤といったいわゆる伝世していた優品を所有していて、明らかに権力を持った人物の居館と考えてよいものだった。調査を担当された中西聰氏が報告書で一五世紀に軍事的要塞として築かれたと記されている。そして、府中や春日山城から関東に向かう交通路の合流点にもなっていて、交通の拠点として重要な意味を持っていたとした。

一五世紀といえば、伝至徳寺の濠で囲まれた範囲が守護所と考えられ、その盛期もやはり一五世紀なのだ。同じ時期に盛期を迎えたということは、守護上杉氏と関東との関係が密接になったとする中西氏の指摘と合致する。氏は続けて横曽根の居館は一六世紀代の遺物が極端に少なくなるとも指摘されていて、これも伝至徳寺（守護所）の出土遺物の傾向と合致する。

いずれにしても、横曽根Ⅰ遺跡も守護所も一五世紀に最盛期を迎えた中世居館だった。

守護所が権力を失っていったように、横曽根Ⅰ遺跡も中世居館としての権威を喪失したということになる。横曽根にはこのほかに二か所の館が確認されていて中世居館が集約されている地域である。これほど館が集積されて行った経緯はわからないが、府中とさほど遠くない距離に三か所の館を要した権威とは何だったのか興味は尽きない。中西氏が指摘するように、関東管領の権威と守護の権威との関係で読み解くのが近道なのであろう。

城館から出土した遺物から

さて、至徳寺、春日山城、福島城、高田城などの城館に加え、横曽根Ⅰ遺跡の出土遺物も再確認していて気付いたことがある。一五世紀の城館遺跡の出土遺物には笏谷石らしきものが見つけられなかったのだ。というよりも、春日山城、福島城、高田城という上杉氏が会津に転封になっても使用されていた春日山城跡や堀氏が築いた福島城、そして高田城では出土しているのに対し、今回再度確認した伝至徳寺や横曽根Ⅰ遺跡では確認できなかったのだ。確認された城館では、高田城が群を抜いて多く出土している。

遺物の内容まで詳細に見てはいないが、春日山城の調査時にみていたのは石鉢などの生活用具が主であったと記憶している。福島城と高田城はいずれ石瓦が多く出土していて、特に高田城はどこを調査しても石瓦が出土していた。ちなみに、御館跡の出土遺物も見てみたが、石瓦だけでなく春日山城のような生活用具も出土していなかった。

このように見てくると、何となく笏谷石の出土に関して傾向が読み取れそうだと気づいた。春日山城は笏谷石の生活用具が出土するが瓦は出土しない、それに対して福島城や高田城は、石瓦が主に出土することが見て取れる。この傾向は何を示すのだろうか。少し推論してみたい。

瓦が主に出土するということは、生活用具として搬入されたものではないことを示しているのではないか、瓦は屋根に葺くために持ち込まれたのではなく、堀氏などが越前から越後に入封する際の運搬にバラストとして積み込まれていたことも考えてよいのではなかろうか。

珠洲焼と越前焼そして唐津焼

春日山城を長く見てきて出土品の傾向、特に焼き物の主たる傾向を考えると、珠洲焼がほとんど出土せずに大半が越前焼であることが分かっている。かつて、石川県の吉岡康暢氏から「珠洲焼は何時頃無くなる?」とよく聞かれたものだったが、春日山城ではその答えを導くことはできなかった。答えは伝至徳寺が教えてくれた。先に述べた一五世紀の守護所と考えられる濠区画の時期には珠洲焼が少なく、新たに越前焼が焼き物の内大型品の主役となっていた。その要因は越前と珠洲という焼き物の優劣ではなく、航海術だということを指摘したことがある。船が大型化して寄港地が少なくなり、越前国の三国港で越前焼を積んで船出した船が珠洲に寄港せずに越中や越後、そして佐渡へと荷を運ぶようになったことが珠洲焼の衰退を招いたと考えた。伝至徳寺の調査は焼き物から航海術、船の大型化まで教えてくれていた。



珠洲焼の片口鉢である。全面にフジツボが付着しているので、海中にあったが漁師の網にかかって引き上げられたものだ。海上がりと呼んでいる。珠洲焼は航海術の進歩で15世紀に衰退がはじまったと推測される。伝至徳寺の調査が衰退の時期と意味を教えてくれた。

もう一点、春日山の調査を行っていたころからの課題に、唐津焼がいつから入るかという問題がある。上杉景勝も肥前名護屋に行っているので景勝のころには唐津焼が入っていると漠然と考えてきた。今回伝至徳寺の遺物で濠区画の堀の中から出土した唐津を見て少し考え方が変化した。一六世紀に入って権力を失った守護所であったが、一六世紀の終わりころに再度使用されている。これまでも守護所に上杉謙信は入らなかったと考えてきた私は、もう一度唐津を見てひょっとして唐津は堀氏が持ち込んだものかもしれないと思うようになってきた。このことは鶴巻康志氏もすでに指摘されている（「上越市史叢書8」）。謙信・景勝政権が守護所を使用していなければ必然的に一六世紀中ごろを中心とした前後の遺物が出土するはずもなく、一六世紀末に至っていたって突然濠を埋める必要も生じることはないだろう。そうすると、濠を埋めるためにエネルギーを費やしたのは堀氏になるのだろうか。

府中八幡宮の鳥居

府中と笏谷石を考えるとき、もっとも注視しなければいけないのは府中八幡社拝殿床下に眠っていた鳥居であろう。元号が





上　新しく安住の地を与えられた府中八幡宮の鳥居
下　真行寺の経蔵の美麗な階段は、いずれも笏谷石だ。



天崇寺の高田姫勝子と初代高松宮妃寧子の墓所と参道の灯篭だ。灯篭の柱は淡い緑色であることに注意願いたい。笏谷石製だ。





上と左は林泉寺の松平光長の嫡男綱賢の墓標と参道に並んでいた灯篭の傘だ。いずれも笏谷石製だ。天崇寺の参道灯篭、林泉寺参道灯篭のいずれも松平光長家ゆかりのものだ。

見えなかったため「乙酉二年」という干支と年数を頼りに元号を探索したところ正保二年という年にたどり着いたことは本誌四一号に述べている。佐藤氏と同じ石を突っついたとも、その時に書いていた。氏からは、鳥居はこれまでの場所を変え、同じ床下でも市民の皆さんが見られるようにしたと聞いた。同じ床下を選択したのは雨にあたらないようにする配慮だとも聞いた。笏谷石は風化しやすく、雨に対する配慮は大切なので鳥居の延命にとても良いことと思う。

ところで、なぜこの鳥居をここで扱うかというと、本稿を執筆するためかつて調査した春日山城跡、福島城跡、高田城跡の出土品を見直していた時、笏谷石が持ち込まれる時期が妙に気になってきたからだ。笏谷石の持ち込まれる時期に波があり、大きく堀氏の入封から松平光長時代（江戸前期の大名家によるもの）、そして幕末から明治期（北前船によるもの）と考えた。





林泉寺灯篭は江戸前期の雰囲気が見れらるもので、前頁の苔生したものに近似する。ライオン像のある館のホール入口の笏谷石製の根石は定型化した切り出しサイズのように見える美麗な笏谷石だ。

受け手がだれかということも大切だ。前者が受け手となっていると時は神社仏閣の寄進や墓所に笏谷石が顕著であり（鳥居も小栗氏の寄進と聞いた）、石廟（細工が容易なことも影響したか）もこの時期のものが多い。後者になると見栄えのする場所を飾る装飾的な利用が増える。岩瀬の森家住宅の玄関先の石敷きの縁飾りとして使用されたり、ライオン像のある館ではホールの観音開き扉の両脇にある飾窓の根石に使用されていた。いずれにしても、そこには財力が背景として存在していることは想像に難くない。藩主であったり海運業で財を成した家であったりするのはそのことを如実に物語っている。

やはり笏谷石

守護所の宴を書こうとして久しぶりに拝見した遺物たちが教えてくれたのは、中世における笏谷石のむつかしさだった。いつだれが持ち込んだか、これは生産地と受け手、それに運搬という行為が複雑に絡んだ結果であることは承知していたが、探せば探すほど暗闇に手を差し込んでいる気持になってきた。

今、我々が目にする笏谷石は江戸時代以降のものだろう。中世に遡る笏谷石は意図的に持ち込まれたものに限られる。さて、また振出しに戻るのだろうか。

左の写真は四ツ谷遺跡から出土した「織部柳図徳利」である。出土した当時、堀氏が所持していたものではないかと考えたことがあった。今また笏谷石のことを考えるとき、理解の糸口は一口の徳利に隠れているような思いがわいてきた。三三年前の調査を思い出し、再度遺物を検証してみたくなった。府中にとって堀氏とは何だったのだろうか。



（上越市学芸員）

歴史は「今日（きょう）」への手紙

残しておくべきもの 伝えておくべきもの

笏谷石鳥居柱を巡って

さまざまな歴史の声に耳を傾ける





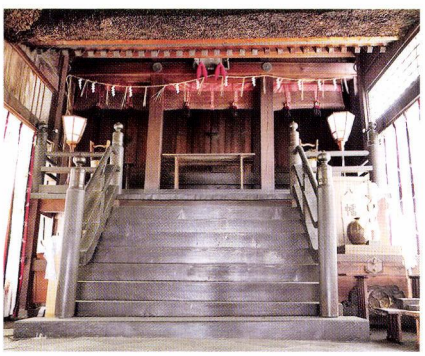
府中八幡宮
上 かやぶき屋根の上に屋根の形状を変えることなくトタンが葺かれている
下 明治 33 年から 39 年の間に発行された最古の絵はがき
（高田・光山石板所印刷）

府中八幡宮は市街地には珍しい、ほとんど手つかずの自然景観を残す地に鎮座している。レルヒ少佐も「神秘的な自然の世界」と、その日記に記しているように、近隣に知られた「藤」の名所であった。また社殿が背にする砂丘の断面からは豊富な清水が湧き出し、水芭蕉が自生するなど、明治二八年に「八幡公園」として開放されている。

社伝（明治一六年神社明細帳）によれば八幡宮は、養老四年（七二〇）宇佐八幡宮、貞観一二年（八七〇）に石清水八幡宮を勧請して「越府八幡宮」と称したとある。

おそらく鎌倉時代から室町時代に形作られたものと言われ、越後守護上杉氏、守護代長尾氏、江戸時代には歴代高田藩主に崇敬されてきていることが分かる。

上杉謙信は、永禄四年（一五六一）に鶴岡八幡宮で上杉憲政から



現在は拝殿になっているが、松平光長寄進の本殿ではなかったかとも考えられている



上杉輝虎（謙信）揮毫と言われる額


堀秀治奉納
高台寺蒔絵「神饌箱」
（上越市の文化財より）


松平忠輝奉納神馬像

山内上杉と関東管領職を相続し、長尾から上杉政虎と改め、その後、将軍足利義輝から一字をもらい輝虎と改めている。このようなことから謙信も府中八幡を篤く保護したと想像するに難くない。それを示すのが、自筆と伝えられる「大神社総社・八幡・諏訪　輝虎」という掲額（額の字については、真筆は失われて、後に輝虎筆として書かれたなど諸説ある）である。

上杉景勝に替わって入封した堀秀治も篤く保護して、美しい高台寺蒔絵を施した「神饌箱」（上越市指定文化財）を奉納している。

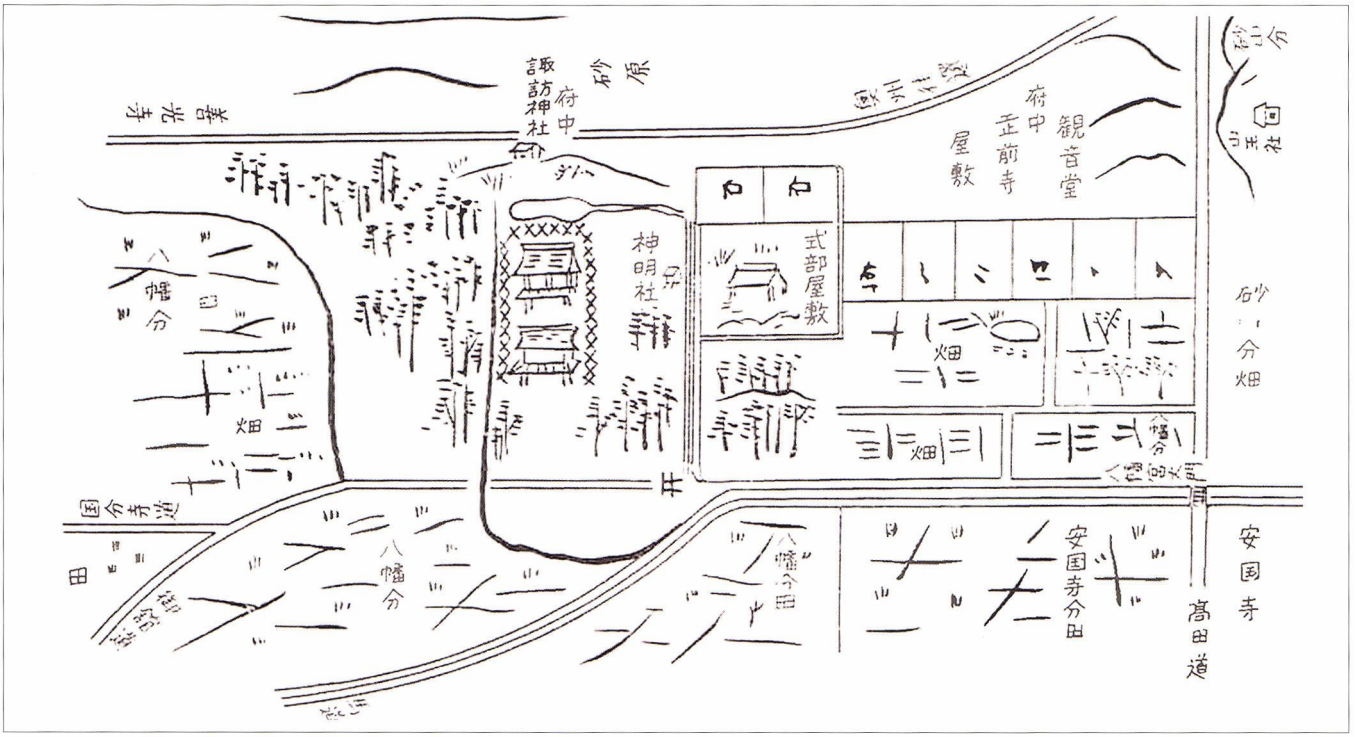
本殿は、寛永九年（一六三二）、高田藩主松平光長の再建と言われている。

この府中八幡宮はどのような神域だったのだろうか。「府中八幡神社四至絵図」を後出する「郷土史」の「府中八幡」に郷土史家の平野団三氏が写し取って載せたものがある。この図を頼りに眺めてみる。（次ページ）

右下に「高田道」という表示があるので近世初頭に描かれたと考えられているが、この道を北上して「砂山橋」（どぶり橋）を渡って左折すると大門があり、天王川（どぶり川）に沿って府中八幡宮の本来の参道「東参道」が始まる。

また、図の右上に観音堂・府中岡前寺（おかまえでら・こうぜんじ）屋敷という説明がある。文安三年（一四四六）六月、道円という僧がこの岡前寺に奉納した「鰐口」（新潟県指定文化財）が府中八幡宮に伝わっていて、岡前寺が府中八幡宮の神宮寺であったことを示すものだと言われている。建物が明確に描かれていないのは、天正七年（一五七九）の御館の乱で焼失したものと考えられている。

この絵図には、ほかに神明宮府中諏訪社、総社、神明宮の名称が見え、府中八幡宮を中心とする神仏習合の世界が展開されていたと想像される。



さて今回、府中八幡宮の文化財を愛する会が上越市地域活動支援事業の採択を受けて、長らく八幡宮拝殿の縁の下に置かれていた鳥居の柱を少し移動して観覧できるように、最近整備した。

この鳥居は福井の足羽山産の笏谷石製で、

奉寄進右之莘表

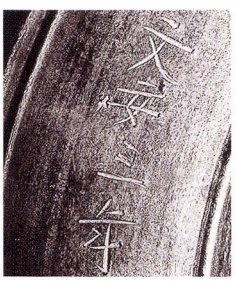
正保二乙酉八月吉日　小栗茂吉敬白

と刻まれている。（正保二年＝一六四五）

年号の刻銘によって、海運による笏谷石の移入年代が分かる貴重な史料と言えるものだが、じつは、今回の移動前は「乙酉」と「小栗茂吉」しか読めなかった。

前出の「郷土史」（第一号）は、昭和三九年に直江津市史跡保存会によって刊行されたが、残念ながら一号で終わってしまったようだ。新大教授中村辛一と郷土史家平野団三の二人が、多岐にわたって直江津の歴史を掘り起こしていて、貴重な参考資料になっている。





岡前寺奉納の「鰐口」
文安三年と彫られている
（上越市の文化財より）

そのなかの平野氏の論考「府中八幡」に、「今は崩壊して床下に収められている石の鳥居の一基に…」として、先のような刻銘があると述べている。

そして小栗茂吉は、松平光長の筆頭家老で越後騒動の首謀者とされた小栗美作の大叔父（養子に出たため美作とは従兄）にあたる人で、府中八幡宮への朱印地の寄進状にも光長の筆頭家老としても連署していると紹介している。

整備の際に設置した看板の説明は、それを引用したものだが、平野氏はどのようにして縁の下に横たわる柱の刻銘を全文読み取れたのか…。

東参道の古絵はがきが、知る限りで二種類発行されている。一枚（1）は、明治四〇年から大正七年の間に発行されたもので、安政二年奉納の燈篭と鳥居が写っている。もう一枚（2）は大正七年から昭和七年の間に発行され、同じアングルだが四人の人物が写っている。

昭和五七年刊の「故郷の百年・上越」（新潟日報事業社）に、（2）の絵はがきが掲載されていて、解説に「中央の鳥居は松平光長の家老小栗茂吉寄進の銘がある」と書かれている。平野氏が「八幡宮」を執筆した昭和三九年には、すでに鳥居は崩壊して床下に収められていると述べているので、解説者はそれ以前に健在の鳥居を見て、刻銘を読んでいたことが分かる―解説者は、この鳥居の前にお住まいだった郷土史家の中沢肇氏か…―。

あるまち歩きで、驚いたことに「昭和四〇年代まで、この辺りに燈篭があって、鳥居もここにあったんだわね」と説明してくださる方が現れた。「昭和四〇年代」というのは、記憶の範囲では間違いとは言えないので、昭和三〇年以降に南参道（明治一九年に国道八号線に開通した後、整備された）へ燈篭と鳥居を移転させようとし、鳥居が崩落してしまい、拝殿床下へ納めたものと推測できないかと考えた。



居多神社北参道の笏谷石の鳥居
笠石が破損して別の石質の笠石が乗せられている
笠石は大正天皇即位記念碑に転用





拝殿床下に置かれた鳥居柱と笠石
上 刻銘の全体は読めない
下 移設工事が進む

それにしても、笠石の半分と銘が刻まれた柱のみ残されて、それ以外はどこへ行ってしまったのだろうか。そして今回の整備に伴って、石質の違う鳥居の柱一本と灯篭の下部が発見された。

重箱の隅をつつくようで、いささかくどいようだが、いろいろな人の「声」（歴史）に耳を傾けることで、見えてくるものが多いことに驚く。

（北越出版・佐藤）



新たに床下から引き出された鳥居の柱



絵はがき（2）



絵はがき（1）

両方の絵はがきには灯籠と南参道に移された鳥居が見える。左手に光っているのは天王川で、(2) の絵はがきの左奥に南参道らしきものが見える



安政２年に奉納されたもので、石工の名前は風化してわからないが、広島県尾道の石工の手になるもの

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

あとがき

前号に引き続き、「上越発展策」Ⅱ。再度、興味深い内容に引き込まれました。特に「克雪」、「農業振興」、「観光・特産品促進」、「人材育成」に関する記述は現在でも変わらず当地域における課題であり、今後、我が上越が発展していくために、官民一体となってその課題に対し真摯に向き合い、そして着実に取組んでいく必要があると感じました。（事務局）

目次

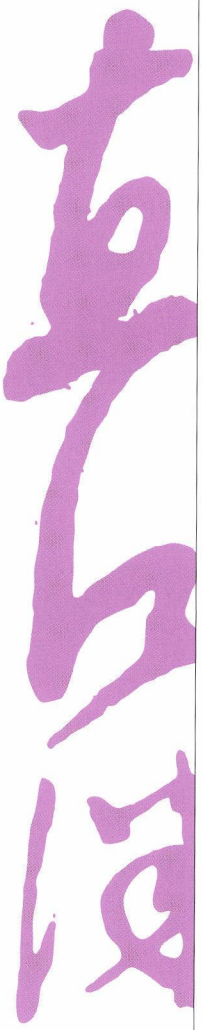
夏から秋へなおえつうみまちアート　4
特集　高田・直江津合併　上越市発足五〇年
一〇〇年前に
「上越発展策」を提言した人たちⅡ　6
頸城の空間を駆ける 国府―春日山―府中―直江津へ ⑥
府中の宴―〝瓦灯〟を素材として―
上越市学芸員 小島幸雄　24
歴史は「今日」への手紙
さまざまな歴史の声に耳を傾ける　30
巻頭エッセイ・私の直江津
直江津の歴史に触れて　小林優樹　2

「直江の津」
第一九巻一号　通巻四九号
発行日／令和四年一月一日
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／小林正夫
問合せ先／上越信用金庫営業統括部
電話 ㈹〇二五（五四三）三一八四
上越市中央一―十一―一
制作協力・北越出版

2022・1号

直江の津

発行／令和四年一月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／㈲北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／ムロハシデザイン



頒布価格／五五〇円（税込）